『ジーキル博士とハイド氏』解釈

竹森　修

「知ろうとする事は存在し、知ろうとしない事は存在しない」――スフィンクス

R・L・スチーヴンスン（一八五〇―一八九四）の作品『ジーキル博士とハイド氏』の同名の主人公が善と悪との「二重人格者」の代名詞になってすでに久しく、また、かかる作品解釈も完全に定着してしまったようです。実際、主人公は、可能的或は潜在的二重人格者である自分自身を、変身自在の、完全な顕在的二重人格者として立たしめようと試みるのですから、作品の筋書を表面的に辿るならば、そういう作品解釈も一見成り立ちます。また、他人事として感ぜしめないこの脅威的作品の読後感は、一般に、「自分もまた潜在的二重人格者ではないか」という不安であり、或は「自分もまた多かれ少かれ二重人格者だ」という反省であるようです。しかし、かかる読み方は、この作品の随処において表現そのものに暗示的重層性をもって滲み出ているところの、作品そのものを陰然と蔽い包んでいる象徴的意味を無視した読み方です。むしろ、かかる解釈の定着は、可能的、潜在的二重人格者である自分自身を完全な顕在的二重人格者たらしめようと試みた主人公をも含めて、人間存在としての私ども自身が本然的に侵されている意識（虚妄分別）の自己満足性なる病と、それを逆に正当化し野放しにし

ている「時代精神」の抜きがたい、死にも至りかねない病を物語るものと言わなければなりません。実際、そこでは二重人格者ということ自体がなんら疑問の余地無きものとして暗黙のうちに了解されており、二重人格者というイメージを成立させている善悪の観念とそれの具現たる私どもの道徳意識、否、道徳意識としての私どもが自足的、自律的なものとして暗黙のうちに了解されています。私が「時代精神」の致命的病と申したのは、他でもない、すでに絶対化されてあるこの善悪の観念、つまり、道徳意識があらためて絶対化され独り歩きしている事実のことです。私どもはそれに「近代的自律の精神」の美名を冠しますが、逆にそれは人間を人間たらしめている存在根拠を無視し、ついには人間存在そのものの崩壊を皮肉にも結果しかねない性質のものなのです。道徳意識は存在の根源的なるものに基きそれに曝されていてこそ道徳意識として成り立ちます。つまり、逆説的ながら、道徳意識はそれ自体の虚妄性の自覚に基いていてこそ道徳意識として成り立つのであって、その自覚が失われることによって道徳意識が絶対化されるとき、道徳意識そのものの崩壊過程が始るのです。最も注目すべきは、道徳意識の虚妄性の自覚が消え去るとき、キリスト教社会において存在の超越的根拠であった「神」そのものがこの道徳意識のなかに取り込まれ、道徳の神、道徳意識の投影としての神に堕してしまうことです。そこでは神は依然存在の超越的根拠とされながらも、その超越的はもはや無意味なものと化し、自我の客体的投影としての超越的に堕し、存在の超越的根拠なるものは虚妄の自我をもって自我の存在根拠とする人間の自己満足を映し出すのみです。意識の自己満足性は人間存在に本然的なものであるゆえに、それはいつの時代でも問題となるのですが、自己満足性の徹底的批判原理――生命的原理――としての神が見失われ、つまり、社会の生命的「共通感覚」‘common sense’（深瀬基寛先生）が失われ、存在の超越的根拠がかく無意味に帰してしまった現代において、逆に、存在そのものの中に存在根拠を求める動きが出てきても不思議ではありません。それは自己の意識を

問題にする立場、つまり、意識としての自己を問題にする立場です。存在そのものの中に存在根拠を求めるということは、虚妄の自我自身をもって自我の存在根拠としているこの意識としての自己の虚妄性、自己満足性を徹底して問うということでなければならず、存在そのものの中に存在根拠を発見するということは、自我の虚妄性の覚知ということであり、また、虚妄の自我が虚妄の自我のままに最初から生かされてあるという覚知なのです。従って、自我の虚妄性の覚知はそのまま存在の超越的根拠の明証に他ならず、かくして、存在そのものの中に存在根拠を発見することは、存在そのものの中に存在の超越的根拠を発見することに他ならず、それは自我の虚妄性の覚知、最初から救われぬ身のままにすでに救われてある身の覚知を措いて他にないのです。意識（分別）としての自我は最初から道徳意識（分別）としての自我としてあるのですが、同時にまた、この自他を分別する自我は、直ぐあとで申すように、虚妄であり、しかも自己中心的に虚妄であって、その意味で、この（道徳）意識としての自我は虚妄分別としての自我なのです。従って、分別としての（道徳意識としての）自我はおのれの虚妄性の自覚があってこそ、虚妄分別（虚妄の道徳意識）のままに少しはまともに働くのです。おおざっぱな言い方ですが、法律は、主体的には、この虚妄の道徳意識の具現化ですが、その虚妄性の自己反省がつねにあってこそ、つまり、あの生命的原理につねに曝されてこそ、法律は、主体的に、法律として成り立つのです。『ジーキル博士とハイド氏』はまさしくかかる問題を読者に問いかけているのであって、だからこそ、この作品においてハイド氏の事件を追及するのが法律家のアタスン氏でなければならず、読者もまた、ひとりの法律家アタスンとして自己を問われているのです。

道徳意識はそれ自体の虚妄性の自覚に基いてこそ道徳意識として成り立つというとき、この自覚は、「私はいかに善を行っても、私は自分の内に悪の能力を本然的に、抜きがたく有し、実際に、時に罪を犯し、或は、しば

しば良からぬ事を考えることによって心の中で罪を犯しており、それゆえに私は偽善者である」といった、いわゆる道徳的反省のことではありません。というのは、「私が私の内に悪の能力を本然的に有す」と言うとき、そこでは、たとえ私の内にであっても、私は私の内に悪を対象化して捉えており、かく悪を対象化することによって、対象化している自分、つまり、「私は私の内に悪の能力を有す」というこの「私」はすでに善しとして暗黙のうちに了解され、棚上げされているからであり、他ならぬこの「私」こそ問題にされるべき当の「私」なのです。もし「内なる、抜きがたい本然的悪の能力」ということをもって「原罪」であるとするならば、それは底の浅い、道徳的な「原罪」の観念であると言わなければなりません。道徳意識それ自体の虚妄性の自覚とは、一切を自己に対して立つものとして自己中心的立場から対象化してながめるこの自足を気取った自己満足的意識としての「私」が虚妄であることの覚知でなければなりません。意識それ自体が自己中心的なのです。識或は眼差しとしての人間存在にあって、主客は、本来、見るものは見られるものでなく、見られるものは見るものでないという意味では対立的関係にありながら、見るものは見られるものとしてのみ表れ、見られるものは見るものとしてのみ表れるという同一的関係にあり、従って、この同一的関係、つまり、自性無き主体客体こそ本来的主体であり客体です。ところが、この「私」にあっては、客体世界は対象的に見る自性を有する客体世界であり、従って、そこでは対象的客体世界に対して立つ自性を有する「私」の成立が含意されており、自性を有する「私」とは、見られる客体を離れて在る「私」が虚妄であるにも拘らず、かかる虚妄の「私」を実在として疑わぬことを意味し、自性を有する対象的世界とは、それをかく対象的にながめている虚妄の「私」の自己正当化にすぎません。しかも、みずから善しとしているこの自性を有する虚妄の私は最初から自己中心的であり、私は自己中心的であることにおいて成り立っている私なのです。対象的にながめるとは自己中心的にながめるということなので

す。かかる私にあっては、自己とはすでに自己中心的他者否定的自己であるゆえに、私が見る他者はすでに私によってその存在性を否定された他者ということであり、他者否定的私の具現としての他者なのです。かかる私をもって善しとしている私ですから、いわゆる道徳の次元よりももっと根深く、抜きがたく、生けるものの本性として私はまさしく偽善に他なりません。「マタイ伝」（第二十三章）の中に次のような一節があります。

「禍害なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ。汝らは白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども内は死人の骨とさまざまの穢とにて満つ。斯のごとく汝らも外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法とに満つるなり。」

私が対象的、且つ、自己満足的にながめる客体世界は、おのれを善しとして疑問をもたぬ自己満足的眼差しゆえに「外は美しく見ゆれども」、実は、自己中心的他者否定的私によって殺され「内は死人とさまざまの穢とにて満つ」る人倫的死の他者の世界であり、しかもそれはとりもなおさず（倒錯的な主客の同一性からして）その眼差しの具現体、虚妄の私の具現体として人倫的死の私自身の姿なのであって、まさしく「外は美しく見ゆれども内は死人の骨とさまざまの穢れとにて満つ」る人倫的死の、偽善の「白く塗りたる墓」です。まことに「斯のごとく汝らは外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満つるなり」と言わなければならず、かく、私は、自分では気付きませんが、すでに一切衆生を殺すことによってみずからを殺し、人倫的死の、虚妄の自我となり果てているのです。しかも虚妄の私は他者によって、つまり、他者否定によって成り立っている、他者否定として成り立っている、私が否定した他者によって成り立たしてもらっているのであることを忘れて、なおも独善的白昼夢に耽っているのです。「白く塗りたる墓」が「白く塗りたる墓」である所以は、かく「白く塗りたる墓」として立ちながら「白く塗りたる墓」として立っているおのれの姿に無知であるところにあります。ところ

で、この人倫的死の、虚妄の自我としての私は、虚妄ゆえに、裏を返せば、殺された本来的自己の人倫的死の姿でもあります。私の手にかかって殺された私の姿です。かくして、私が自己満足的、対象的にながめる他者の世界の実体は、私によって殺された人倫的死の客体世界であり、また、そこにそれとして具現している虚妄の私の人倫的死の姿であり、さらにまた、殺された本来的自己の人倫的死の姿でもあり、そういう三にして一なる意味において、それは「白く塗りたる墓」なのです。ということは罪それ自体が罰であるということです。

かように、私は最初から自己中心的他者否定的であり、且つ、かかる私をもって善しとしている偽善者であるゆえに、私は最初から「罪悪深重の凡夫」として立っているのであり、そういう自己中心的私が下す善悪の判断はまことにいかがわしく、そういう自己中心的私が行う善行なるものもまたいかがわしく、善行悪行はまさしく善業悪業であって、悪も業なれば、善も業なのです。親鸞上人は「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり」と申され、また、「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに……」と申しておられます。尤も、肝心なことは、佐竹温知氏が言われるように、このお言葉はその直ぐあとにつづく「ただ念仏のみぞまことにておはします」（『歎異抄』）があってはじめて成り立つものであるということであって、後者なくしては、前者は、単に自我の虚妄性の対象的、或は、一般的認識にすぎず、かく対象的に認識する私はなんら問われることなく棚上げされ、自己満足的無知の居直りを物語るだけです。「よろづのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに」とは、まさしく「この私の救われなさ」ということであり、この「私の救われなさの自覚」（佐竹温知氏）が「ただ念仏のみぞまことにておはします」となるのであり、そこにおいて救われえぬ身のままにすでに救われてあるのです。

ところで、私が自己中心的他者否定的であるということも、私の強さではなくて、この私の救いようもない弱

さを物語っているにすぎません。なぜなら、私が必然的に自己中心的他者否定的であるということは、この自性を有する私が他者否定的（所有的）でなければ成り立たないということ、私が否定した（所有した）他者に依ってでなければ成り立たない、私が否定した（所有した）他者としてでなければ成り立たない私であり、かようにして成り立たしてもらっている私であるからです。そのようにみると、自性を有する私は自性を有するのではないゆえに虚妄の私であり、自性を有するとは、みずから否定した他者に依って逆に成り立たせられている虚妄の私でありながら、その私の実体を覚知せず、逆にそれ自体で成り立つ、その意味で、真実の自己として疑わないという、救いようなき無知の傲慢さを物語るのみですが、その傲慢さは救いようなき弱さの裏返しとしての無知の傲慢さに他なりません。どうにもならぬ人間的弱さであるゆえに、この「罪悪深重」は、本来、道徳的断罪の対象となるべきものではなく、自己を責める自己すらも自己執着的自己として虚妄であり、自己の対象化ゆえに偽善的であり、ただただ「救われなさの自覚」へと転回すべき人間的弱さなのです。

『ジーキル博士とハイド氏』はまさしくかかる問題を読者に問いかけているのです。あのギリシャ悲劇『オイディプス王』の同名の主人公は「知ろうとする事は存在し、知ろうとしない事は存在しない」というスフィンクスの謎に、「それは人間だ」と答えましたが、『ジーキル博士とハイド氏』もまた、デルフォイのアポロンの神託所に掲げられている箴言「汝自身を知れ」の化身とも言うべきこのスフィンクスとして、スフィンクスの謎を私どもに問いかけているのです。「知ろうとする事」、「知ろうとしない事」のその事とは、この私なる自我の非在性の事実、素性自明としているこの私の素性の虚妄性、素性不明の事実であり、私の自己中心的他者否定的素性、「白く塗りたる墓」なる隠れたる素性です。私はこの私をもって善しとし素性自明として自己満足し、無問

題的安定をおのれの日常性としている非在の存在ですが、しかしこの無問題は、かかる私について無知であり、且つ、「知ろうとしない」という意味での無問題にすぎません。非在の非在たる所以は、かく非在としてありながら非在たることを知らず、非在をもって存在としているところにあります。私がおのれの非在たることを「知ろうとしない」とき、なるほどその非在の事実は自覚的には存在しない、つまり、「知ろうとしない事は存在しない」のですが、それによって私自身が自己満足的に非在のままである、「存在しない」のであるゆえに、「知ろうとしない事は、存在しない」とは、言いかえれば、「私が知ろうとしない私は存在しない」ということを意味し、動詞の主語としての私と目的語としての私は相互還元されうる私であり、従ってまた、「知ろうとする事」のその事とは問題であると同時に存在そのものなのです。というのは、非在は、自己満足的であるかぎり、非在たる事を知りませんが、非在が非在たる自己を知るとき、他ならぬその知において非在の自己は非在の身のままに非在を超えしめられている、その非在の覚知において非在のままにまさしく存在として立たしめられているからであり、しかも、そこにおいてはじめて、最初から非在の身のままにすでに存在している自己を知るのです。実際、非在の自己が非在の自己という事実を「知ろうとする」とき、はじめて非在の自己が存在しはじめるのです。

かように、人間存在は自己満足的無知をもっておのれの日常性としていますが、しかし、一方ではその無知に満足しながら、他方ではその無知に不満であるという本然的自己矛盾として立っているところに人間の人間たる所以があるのです。実際、あのデルフォイの箴言「汝自身を知れ」と、それの具現たるあのスフィンクスの謎に絶えず駆り立てられているかのごとく、その意味において、私どもは無知でありながら（従って、暗号的ながら）、否応なしに無知の愛知者として立たざるをえず、それが無尽の煩悩の意味するところであって、煩悩は無

知ながら無知たることを悩んでいるのです。尤も、それはスフィンクスの謎にみずから直面せずにはおれず、しかも謎を解くこともできず、逃げ出すことによって喰い殺されるという過程を空しく繰り返す、無知を愛する似而非愛知者ではあります。

かくして「知ろうとする事は存在し、知ろうとしない事は存在しない」という、あのスフィンクスの謎の答は、オイディプスが答えたように、まさしく「人間」であり「人間存在」です。言いかえれば、主語と目的語が相互還元しうる人間という意味において「知ろうとする人間は存在し、知ろうとしない人間は存在しない」ということですが、それは「人間が人間に成る」（上田義文先生）という意味での「人間」という答を予想する謎です。「人間は人間である」と言うとき、その「である」人間、'being'としての人間は非在の人間であり、この非在の人間が非在であることの覚知において、その覚知として「人間に成る」のであり、非在であることの覚知であるゆえに、この「成る人間」、'becoming'としての人間は、真実の意味において、「である人間」、'being'としての人間に成る'becoming'のです。しかしながら、この過程はまことに苦悩に満ちた過程です。あのオイディプスが「それは人間だ」と答えることによって決定的苦悩をわが身に招くことになったように、私どももまた「知ろうとする事は存在し、知ろうとしない事は存在しない」というスフィンクスの謎に「それは人間だ」と答えることにより、一切の自己満足のたかみを空無化する底無き苦悩の深淵に身を投ずることになるのです。それは、素性自明として疑わぬ自己が実は虚妄の素性であり、素性不明であったという事実が、一切の事象を通じて（というのは、一切の事象が現に自己を問うているのであるから、）次第に明らかにされる素性探索の過程です。言いかえれば、素性不明の自我とは自己中心的他者否定的虚妄の自我であるゆえに、それはこれまで善しとしていた自己が、実は、自己中心的他者否定的虚妄の自我であったという自己の真実の素性が明らかにされてゆ

く過程、「罪悪深重の凡夫」たる自己の覚知への過程です。あのオイディプスにおけるごとく、それは見えているかにみえながら見えていないこの眼差しの盲目の事実の覚知であり、盲目の事実の覚知というかたちでおのれのあきめくらの両眼をくり抜き、かくして真実が見える盲目となることです。尤も、生れぬ先から、父親殺し、母親との結婚という大罪を犯す呪われた運命にあり、且つ、知らずしてこの大罪を犯すオイディプスが、かかるおのれの素性に無知であったように、人間として生れるということが、必然的に、知らずして自己中心的他者否定的虚妄の自我として立つことであり、この「罪悪深重の凡夫」たる自己はかく後天的動機無くして成立している自己の過去性であるゆえに、自己の絶対的過去性であり、それの自覚は、犯さずして犯してある、無実にして真実有罪である「原罪」の自覚、「宿業」の自覚であると言わなければなりません。真実を知るとはおのれの虚妄を知ることであり、おのれに無知にして自己隠蔽的な虚妄の自我がかく虚妄の自我の覚知というかたちで曝されることであり、まことに、真理とは非隠蔽性（アレーティア）に他なりません。

「弁護士のアタスン氏はにこりと笑みを浮べることもない、ごつごつした容貌の男で、ものを言うときは冷やかで、口数少く、納弁で、感情を外に表さず、痩せぎすで、背高く、無味乾燥で、陰気くさく、それでいてどこかしら愛すべきところがあった。親しい者同士の集りや、出された葡萄酒が口に合ったときには、著しく人間味のあるものが彼の眼から輝き出るのであった。それは、なるほど彼の話し言葉に入ってくることはついぞなかったが、それは食後の顔のこうした沈黙の文字（眼のこと――訳者）で語るというだけではなく、彼の生活行動でよりしばしば、より大声に語るのであった。」

スチーヴンスンの作品『ジーキル博士とハイド氏』は、ジーキル博士の弁護士であるアタスン氏の人物描写で始っています。書き出しの部分をみますと、この男はどうも鉄仮面がそのまま素面であるような、人間味の無い、

生来の謹厳居士みたいですが、その直ぐあとの部分をみると、それは性分ではあっても、やはり、ぎりぎりのところで他者意識の仮面であって、気のおけない友達の集いの席で、あまり身構える必要のないとき、とりわけ口に合った葡萄酒で心ほぐれたときには、人間味ある素面が眼の表情となってその仮面に抑えがたく滲み出て、その鉄仮面が素面ではなくて仮面であることをみずから露呈するのです。ということは、他人様に覗かれる恐れのない心の中ではいつも人間味ある素面が丸出しであるということでもあります。この他者意識の仮面は、アタスン弁護士だけでなく、私どもにおいても抜きがたい人間的事実です。ということは、また、仮面を仮面として成り立たせている内なる素面も抜きがたい人間的事実であるということです。ところで、この男はやはり筋金入りの謹厳居士で、常日頃自分に厳しく、葡萄酒好きにも拘らず、「独りでいるときはジンを飲んで、葡萄酒を飲みたい気持を鎮め」、また、「芝居好きにもかかわらず、二十年間一度も劇場の入口をくぐったことがない」という、自分を律することのまことに厳しい、つまり、自制心の強靱な男です。自制心とは自己を抑制する自己ということですから、この男は、その意味で、まことに部厚い仮面を被った男、仮面が部厚すぎて殆ど素面化してしまった男です。かように、他人様の前での他者意識に基く自制というだけでなく、だれも居ない、自分独りに関わる場合でも自制心が強いというのですから、これはまた、いわば、自己意識に基くまことに真面目で筋金入りの自制であると言わなければなりません。尤も、他者意識とはその他者として表れている自己の意識として、自己意識に他ならず、他方、自己意識とは対象化された自己、その意味で、他者化された自己の自己意識なのであって、いずれも対象化された自己を自己意識する、或は、自己の対象化としての他者を他者意識するということであって、同じ処に発しているのです。かかる他人抜きの絶対的自制はそれなりに立派であり、他人抜きゆえに偽善抜きの、自制のかたまりみたいなものですが、それにも拘らず、或は、それだけに一層切実な意味において、

他人抜きは偽善抜きということにはならないのです。というのは、自制が自己目的化されるかぎり、自己を抑制する自己はなんら問われることなく、善しとして棚上げされているからであり、自制心が強ければ強いほど、この自己そのものの本然的偽善性がそれだけより深く自己から隠れてしまうことになります。

さて、かく自分に厳しいにも拘らず、アタスン弁護士は「他人に寛大であることでは定評があり」、他人が不行跡を犯したときには、よくもそれだけの勇気があるものだと、「時に羨望に近い念をもってその盛な血気ぶりに驚嘆し、どんな極悪非道の犯罪の場合でも、犯人を非難するよりはむしろ助けてやりたい気になる」男であり、あの、旧約聖書の「創世記」に登場するアダムとイヴの長子カインの、弟アベル殺しについては、つねづね「わしはカインの異端の方が好きだ。わしなら弟を弟にふさわしい仕方で地獄へ行かせてやる」とさえ申すのです。この人物は自己に対するその厳しい自制において自己抑制的仮面として立ち、且つ、その自己抑制的仮面が定着して殆どこの男の素面にまでなっていますが、他方、極悪非道の犯罪者にまでかく寛大で、「非難するよりはむしろ助けてやりたい気になる」というところに人間味溢れる素面が表れていて、その事が初めの引用の中の、「著しく人間味のあるものが……彼の生活行動でよりしばしば、より大声に語るのであった」という部分の意味するところでありましょう。自分に厳しく他人に優しいとは、この男まことに申し分ないように見えますが、それだけに一層切実な意味において、実際にはいささか申し分があるようです。犯罪者にも寛大であるという、いわゆる善としてのこの人間味溢れる素面は、同時にまた、いわゆる悪への潜在的意志という、全く別の意味での人間味溢れる素面とひとつに織りなされている、或は、前者が後者を隠す仮面になっているのです。というのは、他人が不行跡を犯したとき、「時に羨望に近い念をもってその盛な血気ぶりに驚嘆する」アタスン氏にあっては、犯罪者への同情は犯罪者への寛大さや、或は、その犯行の動機、その他への同情であると同時に、いわゆる悪を

犯したくても犯す勇気のない自分に引き比べて、悪を犯す勇気のある犯罪者への羨望的共感としての同情にもなっているからで、そういったことが「わしはカインの異端の方が好きだ。わしなら弟を弟にふさわしい仕方で地獄へ行かせてやる」という言葉となって表れているのです。この言葉は、彼の厳しい自制心がなにか本来的根拠に基いた自己抑制的仮面（しかも、定着して殆ど素面化しているはずの仮面）であるかにみえながら、結局、いわゆる偽善の自己抑制的仮面にとどまっていること、しかも、その事実を曝露し、同時にその偽善的仮面を突き破ろうとする素面的衝動が、いわゆる悪への衝動として彼自身の内部にわずかながら働いていることを物語っています。

ところで、不幸な人びとへのアタスン弁護士の同情にはさらにいまひとつ考慮すべき要素が含まれています。

「こういう性格なので、没落してゆく人びとの人生における最後のまっとうな知人、最後の善き感化者となることが往々にして彼の定めであった。そしてまた、このような人びとに対して彼は、彼らが法律事務所のあたりをうろつくかぎりは、彼の応接態度をこれっぽちでも変えたことがただの一度もなかった。」

弁護士として模範的であるばかりでなく、人間としてまことに模範的人物であると感心しながら、「法律事務所のあたりをうろつくかぎりは……」というくだりまで読んでくると、いささか首をかしげたくなり、「こういう性格だから」に当る英語‘in this character’を「この（弁護士）の資格において」と解釈したくなります。これをみると、他の人びとがみな見棄てて去っていった後も、「没落してゆく人びとの人生における最後のまっとうな知人、最後の善き感化者」としてふみとどまるアタスン氏のその定めは、どうやら、全部とは言わないまでも、半分くらいは、人間としてではなくて「弁護士の資格において」のことらしく、「没落してゆく人びと」

への彼の同情は、この意味でもまた、弁護士としてという但し書き付きの、つまり、外的条件に左右される、仮面的同情であるようです。本来、同情とは無条件的同情でなければなりませんが、「法律事務所のあたりをうろつくかぎりは」という条件付きとは、弁護を依頼しようかしまいかとためらっている人びとに「さあさあお入り」と救いの手を差しのべてお顧客さんにすることができる「かぎりは」ということみたいで、大事な金づるゆえの「お顧客様は神様」であるみたいで、もしも金庫目当てに「法律事務所のあたりをうろつこう」ものなら、応接態度を変えるどころの話ではなく、「没落してゆく人びとの人生における最後のまっとうな知人、最後の善き感化者となる……定め」などどこかへふっとんでしまうことでありましょう。どうやら、アタスン氏の「没落してゆく人びと」への同情は、酷な言い方ですが、多分に弁護士ゆえの仮面的同情であり、また、みずからは没落を知らず、自己満足的、迷妄的たかみから見下すごとき、人間の自己中心的本性ゆえの仮面的同情であり、自己満足のたかみが覆され、その迷妄性、仮面性が曝露されることによって没落してしまうごとき同情のようです。しかも、「応接態度をこれっぽちでも変えたことがただの一度もなかった」とはいっても、御当人は、最初にあったごとく、「感情を外に出さぬ」人物ときているのですから、意地悪くかんぐれば、これまた楽々とよそおえる偽善的仮面であり、だれも覗きっこない心の中では感情を露骨に表しているのかもしれません。これほどまでに仮面と素面とがひとつに織りなされ、仮面が実は素面であり、素面が実は仮面であるということになると、どうやらこの仮面と素面とは、本当に、仮面が素面であり、素面が仮面であるという風に、相互還元しうる、同質的なものであると考えたくなります。事実、それは自己中心性ということにおいて同質的なものであり、自己中心的自己が或は仮面となって表れ、或は素面のままで表れるのです。尤も、以上のかんぐりが当っているとしても、アタスンの振舞いは人間としてまことに無理からぬことであり、だれでもやりそうなことであり、実際、だ

れでもやっていることなのです。それだけにアタスンの問題は他人事ではないのです。

そうみてくると、これはまことに由々しいことになります。自己中心的とは他者否定的ということ、他者を自己充足の道具として見ているということです。自己中心性は生きものの本性であり、自己中心性の否定は生そのものの否定となるほどにいかにしても抜きがたい生の事実です。実際、一切の事象を自己に対して立つものとして対象的に捉える、この対象化作用としての意識そのものが最初から自己中心的なのであって、そこにおける他者とはすでにその存在性を否定された他者、自己中心的自我の投影としての他者であり、自己とはすでに自己中心的自己、他者殺しの自己なのです。一切の他者否定的行為は自己のこの実体に由来し、また、かかる実体の具体的表現として自己のこの隠れた実体を露わにするものです。そういう角度から見ると、ジーキル博士とアタスン氏との関係はただの顧客と弁護士、或は、親友同士という関係ではなく、ジーキル博士のスキャンダルは、アタスン氏にとって、そういう意味でのただの他人事的自分事ではなくて、全くの自分事になってまいります。法律家のアタスン自身がすでに他者殺しの自己として立っていることにおいてジーキル博士なのです。ジーキル博士 Dr. Jekyll の名前の 'Je' はフランス語で「私」であり、'kyll' は同音の 'kill'「殺す」に通じます。つまり、ジーキルは「私は殺す」を自分の姓名としているのです。（このフランス語と英語の混成は、それが国際的であることによって人間存在に普遍的な名前であることを示すものと受けとってもよい。）丁度、ジーキル博士が彼の起す傷害、殺人のスキャンダルを通して、そのスキャンダルの由って来たる彼の絶対的過去性たる自己中心的他者否定的自我、つまり、「私は殺す（ジーキル）」としての私というジーキルの素性を露わにしてゆくように、アタスン氏もまた、ジーキル博士との交渉を通して、「私は殺す（ジーキル）」としての意想外の自分の素性を露わにしてゆくのです。言いかえれば、ジーキル博士が起す数々のスキャンダルが、無自覚のうちに「私は殺す（ジーキル）」というジーキル自

身の隠れたる人間的素性の探求過程になっているように、ジーキル博士との交渉が、無自覚ながら、アタスン氏にとって「私は殺す」としてのアタスン自身の隠れたる人間的素性の探求過程になっているのです。「私は殺す」としての私という隠れたる素性、これこそジーキル博士の（従ってまた、アタスン氏の）いわゆる分身であるハイド氏の含意するところでなければなりません。つまり、虚妄の自我としてのジーキル博士の隠れたる正体たる「私は殺す」としての私が殺人者ハイド氏であり、ハイド氏の隠れたる正体が「私は殺す」として私ジーキルなのです。Mr. Hyde はまさしく Mr. Hide（「隠れる」）なのです。それは、ジーキル博士が隠れて殺人鬼ハイドに変身したがゆえに、ジーキル博士の隠れたる正体が殺人鬼ハイド氏、つまり、「私は殺す」としての偽善のジーキルであるということで了るのではありません。ジーキル博士が殺人鬼ハイド氏に変身したということは、最初から「私は殺す」としての私であるジーキルのこの隠れた素性（「私は殺す」としての私＝殺人鬼ハイドとしての私）がそこにおいて個別的なかたちで具現したということであり、かく具現しながら、おのれのこの実体が依然彼自身の眼に隠れているということであり、殺人鬼ハイド氏はジーキル博士の、人間存在に本然的に具るこの隠れた素性、露わになりながら無自覚ゆえに依然隠れている素性を指し示しているのです。

ところで、この私は最初から「私は殺す」として成り立っている私ジーキルであり、知らずして他者を自己充足の道具としてすでに「私は殺し」ており、かく殺すことによって、同時に、自性無き、従って客体としてのみ顕現する開かれた愛としての本来的自己を知らずして「私は殺し」、かく本来的自己を「私は殺す」ことによって知らずして人倫的死の虚妄の自我として立っている、別に言えば、「私は殺す」としての虚妄の私が本来的自己を殺すことにおいて、「私は殺す」としての私自身を「私は殺し」て人倫的死として立っているのですが、私は「私は殺す」という私の隠れたる素性に気付かず、かかる私を善しとして自己満足し、人倫的死の安定にある

偽善のジーキルです。尤も、知らずしてが隠れたるであり、隠れたるが知らずしてであるゆえにこの偽善はまことに切実ではあります。ところで、注目すべきことに、見るものは見られるもの、見られるものは見るもの、という主客の同一的関係がここでは倒錯的なかたちで成立し、「私は殺す」としての私は、自分では無知であり、従って、隠れていますが、私が殺した客体として表れ、私が殺した客体としてのみ成立しているのです。裏を返せば、殺されて人倫的死となり果てた客体世界は、殺した私はかかる自分に無知であり、従って隠れていますが、「私は殺す」としての私としてのみ具現しているのであり、また、「私は殺す」としての私は私によって殺された私の本来的自己の人倫的死の姿であり、言いかえれば、「私は殺す」としての私が本来的自己を殺すことにおいて殺し人倫的死となり果てた虚妄の私自身の姿なのです。かくして「私は殺す」としての私は、私が殺した当のものの具現するところとなっているのですが、それはまさしく呪いとしての具現であり、殺されたる者は死神となって私に取り憑き、「私は殺す」としての私は私が殺した者によってすでに呪い殺されて人倫的死の姿になり果てているのであり、その意味で、他者を「私は殺す」ことにおいて、他ならぬ私を「私は殺す」という「私は殺す」としての私なのです。罪それ自体が罰なのです。かく、私は「私は殺す」としての私であるゆえに、この私が最初から殺人鬼ハイドとして立っているのであり、私ジーキルは「私は殺す」なる私として最初から殺人鬼ハイドなのです。しかし、「私は殺す」としての私は後天的に無動機の、犯さずしてすでに犯してある、その意味で絶対的過去の罪業であり罪業の身であるゆえに、「私は殺す」なる私の素性、つまり、殺人鬼ハイドなる私の素性は最初から私自身の眼から隠れてしまっているのです。Mr. Hyde はまさしく Mr. Hide（「隠れる」）であり、かく、ハイドは最初から隠れていて、自己満足的無知の私の奥深く隠れたるハイドとして隠れているのです。しかしながら、自己満足的無知とはいえ、「私は殺す」としての私なるこの罪業は絶対的過去の罪業であ

り、私が知らずしてすでに最初から、犯さずして犯してある「宿業」であるゆえに、犯すも犯さぬもおのれ次第というような力量ある私など（自由意志など）かえって自己満足的無知を表す迷妄であるごとき罪業であるゆえに、それはまことに無理からぬ無知であり、人間存在として生れる以上、いかにしてもこの宿業を免れえぬごとく、この宿業の身の無知をも免れえません。後天的に、いかにいわゆる罪無き（innocent）ひとでも、いかに無邪気で汚れ無く（innocent）、いかに身に覚えがない（innocent）ひとであろうとも、この絶対的過去の罪業を犯さずして（innocent）犯しながら、この宿業のわが身に無知なる（innocent）、おめでたい（innocent）人間たることを免れることはできないのです。（尤も、宿業のかかる一般的、対象的問題化は、主体的に「知ろうとしない事は存在しない」のであるゆえに、かえって無問題化を意味し、知ろうとしない自己のおめでたい無知と非在性を物語るものです。）この「私は殺す」（殺人者ハイド）としての私は、現実には、かように「私は殺す」（殺人者ハイド）としての私の素性について自己満足的無知なるただの私ジーキルなのですが、この自己満足的無知は、実は、「私は殺す」としての私の絶対的過去の罪業の素性を忘却し、未だ記憶として「受動的虚無」（西谷啓治先生）の忘却の深淵から現れてこない状態であって、自己満足的無知としての私は自己満足的忘却としての私なのです。隠れたる「私は殺す」（殺人者ハイド）としての私ジーキルが対象的実在としてながめる客体世界は、私自身は無知ですが、実は、私が絶対的過去において殺して人倫的死の非在の世界となり果てた客体世界（＝「私は殺す」としての私が殺して人倫的死となり果てた非在の本来的自己）なのであり、その意味で、絶対的過去の罪業の記憶としての非在の客体世界（＝非在の本来的自己）です。犯した罪業は、たとえ忘れられてしまっても、ひとつの記憶として「私は殺す」（殺人者ハイド）としての私ジーキルの忘却の深淵深く隠れひそんでいるのであり、記憶ゆえに必ずや忘却の深淵から蘇り、私ジーキルを絶対的過去の罪の意識として呵責する定めにある記

憶です。しかも、犯された絶対的過去の罪の記憶は、そこにそれとして表れているところのその罪を犯した絶対的過去の私、つまり、「私は殺す」（殺人者ハイド）としての私の記憶であるゆえに、私ジーキルの自己満足的無知のたかみ（実は、忘却の虚無の深淵）の中核に「私は殺す」（殺人者ハイド）としての絶対的過去の私が記憶として隠れひそんでいるわけです。別に言えば、絶対的過去の罪業ゆえに、私ジーキルは無罪にして身に覚えなく、無邪気にして無知でおめでたい私としてあるために、「私は殺す」としての私のこの絶対的過去の素性は隠れてしまってただの健全なる私ジーキルとなり、隠れてしまった「私は殺す」としての私＝殺人者ハイドとしての私は隠れてしまった「私は殺す」としての私という意味でもまさに隠れたる殺人者ハイドとしての私となって、忘却の深淵深く隠れひそんでいるのです。そして、この忘却された絶対的過去の罪業の記憶としての殺人者ハイドなる私（「私は殺す」としての私）は罪の意識として蘇って、自己満足的無知（忘却）のたかみにあるただの私ジーキルを脅かしては「私は殺す」としての私（殺人者ハイドとしての私）というその絶対的過去の素性の覚知を迫るのです（虚妄の自我の自己矛盾性、自己破壊性）。

さて、私が対象的実在としてながめる客体世界が、私自身無知ながら、実は、かように「私は殺す」としての私の絶対的過去の罪業の結果として人倫的死の客体世界であり、それの記憶化であり、且つ、その絶対的過去の罪業の結果人倫的死として立つ現在の私の、そこにそれとして表れている人倫的死の姿であるとすれば、この対象的実在とは、従ってそこにそれとして表れている私自身の絶対的過去の罪業の自己満足的忘却の深淵にすぎず、また、その罪業の結果たる人倫的死なる現在の私、絶対的過去性に呪縛された現在の私、について自己満足的無知の、受動的虚無のたかみにすぎません。言いかえれば、絶対的過去において殺された客体世界、殺された本来的自己が、その絶対的過去の罪即絶対的過去の罰として、「私は殺す」としての私を呪い殺し最初から人倫的死

たらしめているのですが、この隠れたる復讐の死神はそれだけにとどまるのではありません。復讐の死神はこの人倫的死のおのれをもってあたかも人倫的生であるかのごとく振舞う自己満足的無知のたかみ（忘却の深淵）の私の奥深くに隠れひそむ私の絶対的過去の罪業の記憶たる殺人者ハイドという隠れたる姿で隠れひそむ復讐の死神ハイドなのであって、お節介にも、私の無知（忘却）の自己満足（人倫的死の安定）を事ある毎に脅かし、この絶対的過去の罪業の覚知（殺された客体世界、殺された本来的自己の覚知）、つまり、殺人者ハイドとしての私、「私は殺す」としての私のこの隠れたる絶対的過去の素性の覚知というかたちで、人倫的死の虚妄の自我なる絶対的過去性の現在の私の覚知を迫るのです。

尤も、復讐の死神ハイドはどこまでもハイドであって、その脅威的働きかけ自体がまた隠れたるかたちをとるのです。つまり、絶対的過去の罪業の果たる現在の人倫的死という私の隠れたる実相になんらかの仕方で私自身が気付くというかたちで表れるのであり、従って、人倫的死という私の隠れたる正体が死神ハイドの隠れて具現するところとなっており、それの自己破壊性がその死神の隠れて働くところとなっているのです。私は先に、私が対象的実在としてながめる客体世界は、実は、隠れたる「私は殺す」としての私によって殺された客体世界の隠れたる人倫的死の姿、殺された本来的自己の隠れたる人倫的死の姿であり、また、そこにそれとして表れている隠れたる殺人者ハイドとしての私の、おのれの罪業によって呪い殺された現在の人倫的死の姿であると申しました。従って、私ジーキルは隠れたる殺人者ハイドとして隠れたる「私は殺す」なる私であり、その意味で私ジーキルの隠れたる正体が殺人者ハイドとしての私であるというだけではありません。殺人者ハイドとしての私自体が、「私は殺す」としての私自身のその罪業によって呪い殺された人倫的死の私であり、しかも、殺人者ハイドとしての私即「私は殺す」としての私ジーキルであるゆえに、「私は殺す」としての私が実は人倫的死の「殺

された私」であり、人倫的死の「殺された私」が実は「私は殺す」としての私なのです。言いかえれば、ジーキル（「私は殺す」）は「私を殺した私」であり、ハイドは「私によって殺された私」です。問題の展開は、「私によって殺された私」ハイドがジーキルとの右の隠れたる自己同一性に気付かずして、「私によって殺された私」というおのれの現実にのみ気付いて自己満足的忘却のたかみにある「私を殺した私」ジーキルに対する復讐（自己不満＝欲望）として立つという虚妄の自我の自己矛盾に始りますが、これを裏から見れば、「私を殺した私」ジーキルの忘却の深淵から「私によって殺された私」ハイドが絶対的過去の記憶として蘇りながら、私ジーキルはこのハイドとの自己同一性に気付かずしてこれを対象的に恐怖し、ハイドの亡霊を忘却の深淵深く再び沈めようとするのです。それこそ「私によって殺された私」なる本来的自己、つまり、客体世界、が復讐の死神ハイドとして、「私によって殺された私」ハイド（虚妄の自我）に即して隠れて働きかけている徴しであり、その働きかけの本意はジーキルとハイドとのかかる反目にあるのではなく、両者の自己同一性の覚知を両者に迫るところにあるのです。この事は、（自己中心的他者否定的）意識としての現在の私が、この犯さずして犯してある絶対的過去の罪業（「私は殺す」としての私）の亡霊に支配され取り憑かれて、すべて「私は殺す」なる現在の私として立たしめられているということであり、また、絶対的過去の罪業の果として人倫的死の虚妄の自我として成り立つ現在の私が、かかる絶対的過去性に基いて成り立っている現在の私の実相を暗号的に見せつけられ、その覚知を迫られているということです。

かかる内面的問題をジーキル博士だけでなく、アタスン弁護士もかかえているとすれば、「わしはカインの方が好きだ。わしなら弟を弟にふさわしい仕方で地獄へ行かせてやる」というアタスン氏の言葉も、弁護士商売にからんだ、犯罪者へのただの仮面的同情というだけでなく、また、彼自身の隠れた本音でもあるというだけでな

く、それは彼自身気付かぬような根源的次元における本音になっているのです。というのは、実際、彼にとって「カインの異端の方が好き」であり「性に合う」(incline to ...)のであり、事実また、彼はすでに「弟にふさわしい仕方で」弟を地獄へ送り込んでいるのだからです。「創世記」第四章に、

日を経て後カイン土より出る果を携来りてエホバに供物となせり。アベルもまた其羊の初生と其肥たる者を携来れり。エホバ、アベルと其供物を眷顧みたまひしかども、カインと其供物をば眷顧みたまはざりしかばカイン甚だ怒り且其面をふせたり。エホバ、カインに言ひたまひけるは汝何ぞ怒るや何ぞ面をふするや。汝もし善を行はば挙ることをえざらんや。もし善を行はずば罪門戸に伏す。彼は汝を慕ひ汝は彼を治めん。カイン其弟アベルに語りぬ。彼等野にをりける時カイン弟アベルに起かかりて之を殺せり。エホバ、カインに言ひたまひけるは汝の弟アベルは何処にをるや。彼言ふ我しらず我あに我弟の守者ならんやと。エホバ言ひたまひけるは汝何をなしたるや汝の弟の血の声地より我に叫べり。されば汝は詛れて此地を離るべし此地その口を啓きて汝の弟の血を汝の手より受けたればなり。汝地を耕すとも地は再其力を汝に効さじ。汝は地に吟行ふ流離子となるべし……

とあります。原罪者にして人類の始祖たるアダムとイヴの最初の子であるカインが、かく、最初の人殺しを、そして肉親殺しを犯したということは興味深い事です。アダムとイヴは「善悪を知の樹は汝その果を食ふべからず汝之を食ふ日には必ず死べければなり」とのエホバ神の禁令に背いて禁断の木の実を食らい、食らうことによって死すべき身となり、死すべき身となることによって死を恐怖する身となり、死の恐怖ゆえにすべてを自己中心的に捉えることとなったアダムとイヴが得た善悪を知るの智は自己中心的に善悪を知るの智に堕してしまっているのです。この原罪者アダムとイヴの長子カインが、神の差別待遇と彼が判断した事柄に原因する嫉妬から弟アベルを殺したということは、アダムとイヴが「善悪を知の樹」の禁断の果実を食べて得、且つ、カインを始めと

して子孫たる全人類に伝えることとなった分別そのものが自己中心的他者否定的虚妄の自我としての虚妄の分別、虚妄の道徳意識であり、原罪を負い、従って、無動機的に、絶対的過去性として最初から神に背くものとしてある人間の善悪の判断自体が自己中心的他者否定的迷妄たることを免れえないことを物語っています。その意味で、おのれを善しとし、善悪をおのれの計らいの内にあるとして疑わぬカインもまた、最初から、隠れたる「私は殺す」としての私、つまり、隠れたる殺人者ハイドとしての私なのであって、カインの弟アベル殺しはこの原罪の身たる虚妄の自我に起因し、且つ、それの最も端的な表現であり、しかも、それがアダムとイヴの最初の子によって犯されたというところに意味深いものがあります。弟アベル殺しは、絶対的過去の罪業（「私は殺す」）としての私、殺人者ハイドとしての私）の果として、絶対的過去の殺人者たる私の亡霊（記憶）である隠れたる死神ハイドに取り憑かれ絶対的に支配されながら、自己満足的無知（忘却）としてある現在の私カイン（隠れたる「私は殺す」としての現在の私、隠れたる殺人者ハイドとしての現在の私）がその自己満足的白昼夢の枕辺に夢魔として突然立ち現れた絶対的支配者死神ハイドの命令に従って、催眠術をかけられた者のように、いまや顕在的殺人者ハイド＝「私は殺す」なる私として犯した最も端的な行為です。この後天的殺人者ハイドとしての私カインが過去の記憶と化して自己満足的忘却の深淵に沈んでゆくとすれば、それは、そこに具現する絶対的過去の私の記憶たる死神ハイドがそこにおいてその自己満足的忘却の深淵の奥深く姿を隠すことを物語ります。しかしながら、カインにおいてはそれはそうならず、弟殺しは罪の意識としてカインに定着して、あたかもカインが「弟の守者」であるかのごとく、或はアベルが兄の「守者」であるかのごとく、カインを悩ますのです。カインの「受動的虚無」の深淵は自己満足的忘却の深淵とはならず、脅威的記憶の深淵となり、殺されたアベルの亡霊、つまり、過去の殺人者カインの亡霊が（記憶として）現在のカインを責め立てるのです。それは、絶対的過去の

記憶の亡霊、つまり、殺された一切衆生の亡霊、殺された本来的自己の亡霊＝「私は殺す」としての、「殺人者ハイドとしての虚妄の私カインの亡霊が、過去の罪業の記憶というかたちで、また過去の罪業の記憶を通して、現在のカインにカイン自身の絶対的過去の罪業を見せつけ、弟アベル殺しという過去の罪業の全面的覚知（過去の「私は殺す」としての、殺人者ハイドとしての私カインの覚知）を通じて絶対的過去の罪業（原罪＝絶対的過去の「私は殺す」としての、殺人者ハイドとしての私カイン）の覚知と、その絶対的過去の罪業に絶対的に支配された現在の私カイン（「私は殺す」としての、殺人者ハイドとしての隠れたる現在の私カイン）の覚知を迫っていることを物語っております。かく、罪の意識として現在のカインを責め立てることにおいて、過去の罪業の記憶、或は、そこに隠れて具現している絶対的過去の罪業の記憶、たる死神ハイドに、この虚妄の自我なる死神ハイドならざる本来的復讐の死神ハイドが隠れて働きかけていることが暗示されています。カインの逃げ腰の罪の意識は、カインの記憶の深淵より、「地より」聞える弟アベルの「血の声」の叫びを含意し、その血の訴えを聞かれた神の「汝の弟アベルは何処にをるや」とのカインへの問いかけを含意し、また、「我あに我弟の守者ならんや」とのカインの返答を含意していますが、かかる後天的過去の罪の逃げ腰の意識は、そのまま、それを通じて、暗号的ながら、絶対的過去の罪の逃げ腰の意識になっているのです。かく、おのれの過去の（絶対的過去の）罪を覚知しようとせず、罪即罰としてすでに人倫的死であるわが身を覚知しようとせず、罪の覚知の（生命の水の）深淵へ人倫的死のわが身を全面的に委ねて溺死することを恐れるゆえに、罪においてすでに呪い殺されてあるカインはこの過去（絶対的過去）のおのれの亡霊に「詛れて」、カインの現在そのものが過去性の現在（絶対的過去性の現在＝「私は殺す」としての、殺人者ハイドとしての私）としてあるために、絶えずそれに駆り立てられ、且つ、それからの遁走の試み自体がその過去性（絶対的過去性）の具現するところとなり、遁走の試みの成功と

思ったものが実は失敗であり、新たなる直面となるのです。また、カインはすでに人倫的死の、非在の存在としてあるために、「地を耕すとも地は再其力を汝に効さじ」とあるように、その行為はすべて「うつろなるひと」の人倫的不毛の行為となり、常住の地を得ることなく、いつまでも「地に吟行ふ流離子となる」定めとなります。

さて、かように、カインが「私は殺す」としての私であり、殺人者ハイドとしての私であるとすれば、弁護士アタスン氏もまた、ひとりのカインとして立っているのです。丁度、カインが弟アベルを殺したように、隠れたる「私は殺す」としての、隠れたる殺人者ハイドとしてのアタスン氏もまた、一切衆生を殺し、殺すことにおいて本来的自己を殺しており、殺されたアベルが、つまり、殺したカイン自身が過去の罪の記憶の亡霊としてカインの内に隠れて宿るごとく、殺された一切衆生・殺された本来的自己が、つまり、「私は殺す」としての、殺人者ハイドとしての私が、絶対的過去の罪業の記憶の亡霊としてアタスンの内に隠れて宿り、「汝の弟アベルは何処にをるや」とのエホバ神の問いかけに、カインが「我あに我弟の守者ならんや」と答えたように、アタスンもまた、同じ内なる問いかけに対して、その事実を自己隠蔽し、丁度、殺されたアベルが「地より」「血の声」をあげて神に訴えるごとく、殺された一切衆生・殺された本来的自己が自己隠蔽するアタスン（ジーキル・カイン）の内に隠れたる死者（殺された一切衆生・殺された本来的自己の隠れたる姿としてのハイド・アベル）として血の声をあげ、自己隠蔽するアタスン（ジーキル・カイン）を内側から脅かし、その隠れたる事実を訴えて「私は殺す」、つまり、殺人者としての私なるアタスン氏の隠れたる正体を明るみへ曝し出そうとするのです。

かく、ジーキル博士が、これから明らかになるように、いわゆる潜在的二重人格者である自分を顕在的二重人格者、つまり、「ジーキル博士とハイド氏」に仕立て上げる試みが惹き起すスキャンダルを通して、右のごときジーキル＝ハイドとしての虚妄の自我の事実を露わにしてゆき、また、アタスン弁護士もジーキル博士との交渉を

通してジーキル・ハイドとしての彼自身の素性を露わにしてゆくのであるとすれば、当然のことながら、作品『ジーキル博士とハイド氏』自体が、その物語の展開を通じて、それを読む読者自身のジーキル＝ハイドなる隠れた素性、つまり、「私は殺す」なる、殺人者ハイドなる隠れた素性を露わにしてゆくのです。スキャンダルのギリシャ語の語源は「躓きの石」という意味だそうですが、実際、ジーキル博士が惹き起す個別的な「躓きの石」は、その展開を通じて、その個別性を超えて自己中心的他者否定的自己という人間存在に普遍的な、本然的「躓きの石」を露わにしているのであり、この本然的「躓きの石」を問うことは、個別的「躓きの石」を曖昧にすることではなく、その個別的「躓きの石」の由って来たる根源的「躓きの石」を問題にすることによって、かえって個別的な「躓きの石」を真に十全なかたちで問題化することになる、その個別的「躓きの石」の個別性が曖昧になるのではなく、かえって主体的に明確になるのです。というのは、問題は、現に「躓きの石」として立ちながら、そういう自分の素性に無知のまま、かかる自分を善しとして疑わぬこの自己満足にあるのであり、この自己満足まで遡って問われぬかぎり、ひとつの「躓きの石」を解決したと思うこと自体が自己満足的忘却と無知に他ならず、その根本原因を自己隠蔽することになるだけであるからです。ジーキル博士の「躓きの石」はアタスン氏にとっても他人の「躓きの石」ではなく、ジーキル博士という個別性を超えて「躓きの石」としてのアタスン氏自身の素性を問うことになるのであり、アタスン氏だけではなく、この作品の登場人物すべてをその問いの中に捲き込んでいるのです。そうなると、私ども読者も安閑としてはいられません。『ジーキル博士とハイド氏』はその作品の個別的枠を超えて同じく本然的「躓きの石」としての、「私は殺す」としての、殺人者ハイドとしての読者自身のこの素性を問うているのだからであり、読者がこの作品を自己を問うものとして個別的、主体的に捉えてゆくことによって、かえってこの作品自体がのっぴきならぬ個別性を帯びてくるのです。まこと

に、『ジーキル博士とハイド氏』はその作品を覗く私自身の姿を映し出す死の水鏡であり、隠れたる「私は殺す」としての私、殺人者ハイドとしての私の自己隠蔽された人倫的死の姿を、その人倫的死の姿として表れて曝け出して見せる隠れたるハイドなのであり、それがこの作品の象徴性というものです。

さて、アタスン弁護士の「感情を外に表さぬ」性分は、時にはかく他者意識の仮面となることもありましょうが、それはまた、仮面ではなくて、実際に素面でもあり性分でもあるのです。同様に、彼の友人関係でさえ、すべて「だれにでも気さくにする」ことから始まるらしく、「慎み深いひと」の例にもれず、彼もまた、自分の好悪に基いて注文つけて友人を選ぶのではなくて、いわば「出来合いのやつを機会の手から受けとる」のです。こういうわけで、彼の友達といえば、「自分と血のつながった者か、いちばん長くつき合っている人たち」ということになり、「彼の友情は相手が自分の性に合うゆえの友情ではなく、蔦のように、時とともに育ったもの」、酷な言い方をすれば、惰性的な長つき合いの産物であるというわけです。遠縁のR・エンフィールド氏との結び付きもそんなところからで、「この二人がお互いの中にどんな取り得を認めているのか、どんな共通の話題を見出しうるのか、多くの人びとにとって首をかしげる事であった」と評されるほどに訳の分らぬ交友であるにも拘らず、日曜になると欠かさず二人連れだって散歩に出かけるのです。しかもその散歩たるや、出遭った人びとの話では、「二人とも全然口もきかず、妙に退屈そうな様子で、途中、友人の姿でも見かけると、ほっとした表情をありありと浮べて歓迎の声を掛ける」という有様です。ところがまた、そういう惰性的日課の散歩であるにも拘らず、「二人ともこうした散歩を何よりも大事にし、それを毎週の目玉行事と見なし、他の遊楽を無視するばかりか、散策を中断されずに楽しむために、仕事の上の呼び出しにまで応じようとしない」という、ますますもって訳の分らぬ散策なのです。

或る時、二人はロンドンの繁華街のとある裏街を散歩していました。その裏街は小さい、ひっそりした処でしたが、平日は商売繁盛で、

「住民たちはみな収入がよさそうだったが、だれもかれももっと収入をよくしょうと競い合い、客の眼を惹こうと収益の余りを店頭の飾り立てに注ぎ込み、そのため軒を連ねる店先は、まるでにこやかに微笑む女店員たちの列のように、その往来に沿ってずらりと立ち並んで客を招くような風情であった。日曜日で、街並みがいつもの比較的けばけばしいあだ化粧を引っこめ、人通りが比較的と絶えているときでさえ、その通りは薄汚い近隣と対照をなして、まるで森林の中の火事のように光彩を放つのであった……。」

二人の日曜の散策のくだりを読むと、なんとなくT・S・エリオットの「プルーフロックの恋歌」の冒頭の一節が思い出されます。

それでは行ってみようか、君も僕も、
手術台の上に乗せられて麻酔をかけられた患者のように
夕暮が空いっぱいに這いのびているころ。
行ってみようじゃないか、うち捨てられたひとげのない街々をとおり
ひとばん泊りの安宿の奥まった隠れ場所や、
牡蠣殻とおが屑のちらばった飲み屋のある街々、
何か途方もない難問へ捲き込もうとする
くどくどしい議論のように
（どこまで続くのか）はてしのない街々を通りぬけ……

「それは何だって？」なんて訊かないでくれたまえ、……

（深瀬基寛先生訳）

「それでは行ってみようか、君も僕も」の「君」と「僕」は、深瀬先生の御指摘のように、「意識あれども何ものをも意識しない」（エリオットの「四つの四重奏」からの先生の引用）、「精神の虚しさのみ深まりゆきて考えるべきことのなき恐怖」（同じ）の只中にある「同じく地獄に堕ちた人間」です。ところで、この「君」と「僕」は、また、君と僕の二人連れでありながら、同時に、君は君として表れている僕、僕の投影としての君であり、さらに言えば、僕が君を君として対象的に見ることにおいて、みずからは気付かずして、そこに虚妄の君として（のみ）表れている自己分裂的虚妄の僕自身の姿です。アタスン氏にとってのエンフィールド氏もまた同様であって、アタスン氏はアタスン氏であり、エンフィールド氏はエンフィールド氏でありながら、同時にエンフィールド氏はエンフィールド氏として表れているアタスン氏、アタスン氏の投影としてのエンフィールド氏、かかる虚妄のエンフィールド氏として（のみ）表れている虚妄のアタスン氏です。エンフィールド氏にとってのアタスン氏についても同様のことが言えます。ところで、この二人の毎日曜日の散策はまさに退屈な日常性そのものですが、その日常性とは散策という毎日曜の行事の繰り返しのことではなく、それを繰り返すことにおいて繰り返されているアタスン氏の、或はエンフィールド氏の日常的自我のことです。互いの内に何ひとつ「取り得」を認めている様子もなく、「共通の話題」も無さそうな二人が「全然口をきかず、妙に退屈そうな様子で」歩いている姿を見ると、どうやら二人ともお互いに対して無関心のようです。しかし、互いに無関心のようでいて、互いに離れられず、毎日曜どんな事があっても一緒に散歩を欠かすことがなく、それでいて散歩を楽しむどころか欠伸ばかりしている、そういうお二人を見ると、これは結婚生活二十何年目の関白亭主とぬかみそ女房の

イメージです。オマエなしでは夜も日も明けなかったあの恋女房も、半年経ち一年経ち五年十年経つうちに次第に古くなり、いまや、関白亭主の無関心の眼差しにはひとつの見慣れた、それゆえに、空気のように無視できる非在の存在になり下ってしまっていて、女房と畳は新しいほどいいなどと威勢のいいことを言い出す始末です。ところが、そういう関白亭主が関白亭主でおれるのもぬかみそ女房のお蔭であり、関白亭主は、実は、自分が空気のように無視し支配している当の女房に空気のように救いようもないほど依りかかって生きているのです。関白亭主はぬかみそ女房によって成り立っている、つまり、ぬかみそ女房として成り立っているのであり、惰性になった日課の出がけのキッスでも忘れようものなら、一日中なんとなく落ち着かず、女房に病気にでもなられたら仕事も手につかず、居ても居なくてもいいはずの女房に二、三日家を留守にされると、もはやわが家はわが家の心地せず、或る日突然家出でもされようものなら、忽ちワレを失い天地がひっくり返り、虚無の深淵に落ち込んで、最初から、女房が居なければ成り立たない、在りもしないワレであったことに気付くのです。アタスン氏もエンフィールド氏も同様の有様なのであり、お互い無関心でいるのですから、その無関心でいる自己は自性を有する自己ですが、その自性を有する自己は、実は皮肉にも、自分が無関心でいる相手によって成り立っている虚妄の自己なのです。しかも、かく無関心でいながら、無関心でいる相手から離れがたいというのですから、この無関心はどうやら無関心的執着ということであり、退屈な相手との退屈極まる日曜散歩が「毎週の目玉行事」で、何よりもそれを優先させるというのですから、まるでそれに自分の全存在が賭けられてでもいるような、それを一度でも欠こうものなら、忽ちワレを失って、大口開けた虚無の深淵に呑み込まれて溺れ死にでもするような、必死の執着ぶり、つまり、虚妄の自己への必死の執着ぶりなのです。

無関心とは、自己中心的自己充足的な意識の概念化作用で他者を概念化というかたちで征服し所有し（他者と

はすでにそういう意味を孕む）その「所有のたかみ」（滝沢克己先生）に立って（他者に対する自己とはすでにかかる「所有のたかみ」を意味する、）ひとつの見慣れた、それゆえ無視しうる風景として他者を見下してしまっていることです。従って、アタスンがエンフィールドに無関心であるとは、無関心の眼差しとして立つアタスンが無視することによってすでにエンフィールドの存在性を否定し、その意味でエンフィールドを殺しており、（つまり「私は殺す（ジーキル）」として、殺人者ハイドとして立っており、）同時に、彼自身が無関心ゆえに人倫的死として立っていることを意味します。しかも、眼差しは見られる客体としてのみ表れるのですから、無関心の眼差しとしてのアタスンはやはりその存在性を否定されたエンフィールドとして表れている、成り立っているのです。従って、アタスンが見るエンフィールドは人倫的死としてのエンフィールドでありながら、同時にそこにそれとして表れた無関心の眼差しである彼自身の人倫的死の姿であって、彼はエンフィールドを見ることにおいて、そこに表れている彼自身の死せる姿を、無自覚ながら、見ているのです。これをさらに言えば、エンフィールドの存在性を否定するアタスンは、彼が存在性を否定するエンフィールドによって逆に成り立たしてもらっているのであって、所有者として立つことにおいて、実は、所有する対象にどうにもならぬほどに依りかかっている、所有する対象によって成り立っている弱者なのです。しかも、無関心は同時にそういう自己の実体に無関心であり、無知であるということでもあって、アタスンは人倫的死である自己に満足している、つまり、人倫的死の安定を得ているわけです。してみると、殺された客体＝殺された本来的自己の人倫的死、「私は殺す（ジーキル）」として立つことによって殺されている私の人倫的死、という虚妄の自我の隠れたる正体の化身であるあの死神ハイドが、ここでもまた姿を隠したままの姿で登場しているわけです。エンフィールドに対するアタスンの個別的無関心は虚妄の自我そのものの無関心的、非在的在り方に根差し、且つ、それの個別化として表れている無関心です。この無関心

なる人倫的死の安定はまことにもって「意識あれども何ものをも意識しない」人びとの世界、人倫的死なる地獄の只中にありながら、その地獄の現実にも気付いていない（人倫的死の安定）苦悩のはらわた無き「うつろなる人びと」の世界です。自己満足的「所有のたかみ」が迷妄に他ならず、自己自身である「受動的虚無」の地獄のどん底に堕ちていながら無知の自己満足に耽っているだけのことであるとすれば、アタスン氏が「没落してゆく人びとの、人生における最後のまっとうな知人、最後の善き感化者となることがアタスン氏の定め」であるなどとはおこがましく、かえって、「没落してゆく人びと」の姿は彼自身の自己認識を迫るものであり、そこでもまた、あの隠れたる死神ハイドがアタスン氏を凝視しているのです。「没落してゆく人びと」は没落において同時に「所有のたかみ」の幻想を打ち破られ、自己の実体を露わにされているのであるゆえに、「没落してゆく人びと」もまた、その「没落」を通して、最初から没落している自己の自己認識を迫られているのですが、他方、死神ハイドは人間の法律の専門家であるこの法律家の自己を問うことによって、法律とそれを支える人間の善悪の道徳意識の非自足的実体を曝露しようと迫っているのです。

さて、先にも申したように、虚妄の私が自己に対して立つものとして対象的にながめている客体世界は、自分では無知ですが、主体的に、「私は殺す（ジーキル）」としての、殺人者ハイドとしての虚妄の私によって殺された客体世界の人倫的死の姿であり、同時に、そのまま、殺された本来的自己の人倫的死の姿であり、しかも、「私は殺す（ジーキル）」（殺人者ハイド）なる私として立つというおのれの絶対的過去の罪業がとりもなおさず罰となり「私は殺す（ジーキル・ハイド）」としての私によって「殺された私」、つまり、「私は殺す（ジーキル・ハイド）」としての私の人倫的死の姿であり、虚妄の私が、そこにそれとして具現している虚妄の私自身の人倫的死の姿を、それと知らずして、ながめているのです。自性を有する私が対象的にながめる同じく自性を有する客体世界は、自己満足的無知の眼差しには無限に広がる堅い大地

に見えますが、実は、それは堅い大地の幻想にすぎず、その無限とは、かくながめる私の人倫的無限定性、無輪郭性、非在性、別に言えば、人倫的窒息死の自閉的状態を物語るにすぎず、実は、右のような意味を孕む人倫的死の「受動的虚無」の深淵なのです。それは「私は殺す（ジーキル・ハイド）」なる私という絶対的過去の罪業の果としての「受動的虚無」の深淵であり、絶対的過去の罪業の忘却の深淵を日常性としながらも、絶対的過去の罪業の記憶（絶対的過去の罪の意識）の深淵となる定めにある深淵であり、また、かかる絶対的過去性に絶対的に支配された絶対的過去性の現在としての「私は殺す（ジーキル・ハイド）」なる私がそこにそれとして表れている深淵です。私は客体世界を対象的になながめることにおいて、実は、この人倫的死の「受動的虚無」の深淵に映る虚妄の私自身の死顔をそれと知らずしてながめているのです。言いかえれば、私は「受動的虚無」の深淵の中にすでに溺死しているのですが、そういう私の実体に気付かず、私はこの溺死の状態に自己満足して（人倫的死の安定）、「所有のたかみ」、「堅い大地」の迷妄に陥り、かかる自分の上に手胡坐かいているのです。しかし、私はいつまでも無知でいることを許されません。私は、暗号的ながら、「所有のたかみ」、「堅い大地」の迷妄に気付き、虚無の深淵の水鏡に映る私自身の死顔に気付きます。私（「私は殺す（ジーキル・ハイド）」としての）は人倫的死というおのれの隠れたる実体（ハイド）に気付くのです。しかも、私自身の死顔はそのままさしく死の顔、死神の顔でもあり、私はおのれの隠れた実体である人倫的死の姿に気付くことにおいて、実は、「私は殺す（ジーキル）」としての私という絶対的過去の罪業の記憶の亡霊たる私殺人者ハイド、「受動的虚無」の深淵の隠れたる主ハイドに隠れたる仕方で気付いているのであり、そのハイドに隠れて表れているところのあの隠れたる復讐の死神ハイド（殺された一切衆生・殺された本来的自己）に隠れたる仕方で気付いているのです。実際、「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る私自身の死顔は、不動でありながら不動ではなく、みずからは動かずして他を動かし、他が動くというかたちでみずから動く、あの隠れたる復讐の

死神ハイドの死の顔です。それは水鏡に映る私自身の死顔でありながら、それを見る眼（隠れたる「私は殺す（ジーキル）」としての私）を見る眼（殺人者にして死顔なるハイドとしての私の眼、それとして隠れて表れた真実の死神ハイドの眼）となっており、見る眼を見るこの眼は、見る眼を見る眼を見る私の眼差しに人倫的死なる私の隠れたる実体（ハイド）を曝すことによって、人倫的死の安定にある私を恐怖に陥れるのです。それは私を恐怖に陥れることによって、他ならぬ「堅い大地」、「所有のたかみ」が自己満足的無知のたかみであり、実は、自己満足的忘却の深淵であり、その迷妄自体が「受動的虚無」の深淵の只中における私の溺死状態であることを告げるのです。しかしながら、恐怖とは強制された対象的認識です。私は「受動的虚無」の深淵において溺死体としての安定（「所有のたかみ」の迷妄）にある私を、それの覚知の中に身を委ねてあらためて溺死（覚知において能動的（生命の水）と化した虚無の深淵における溺死、つまり、溺死している自己の現実の覚知、「所有のたかみ」の空無化）をなす「苦悩の能力」（深瀬基寛先生）をもたず、私の自己認識は対象的、且つ、隠れた自己認識にとどまるのです。対象的自己認識は必然的に自己隠蔽、自己忘却を求める逃げ腰の姿勢となり、それが人倫的死の安定なる日常性への執着となって表れます。従って、この執着の充足によってハイドは再び背後に空しく隠れてしまうことになります。

アタスンとエンフィールドの奇妙な散歩もまたかかる含蓄を有するものです。彼らは隅から隅まで見慣れた、従って自己を攪乱される恐れのない生活風景をくり返すことによって、実は、彼ら自身の無問題の、人倫的死の安定の自我をくり返し、くり返すことによって自我の信憑性の確証を求め、こうして自我の（実は人倫的死の）安定を保とうとしているのです。というのは、人倫的死の安定の「所有のたかみ」の迷妄の下からあの「受動的虚無」の深淵の水鏡の死顔が絶えずそれとなく現れて自我を脅かすのであり、脅かされた自我はその死顔から遁

れるべく（実は自己隠蔽、自己忘却の空しい試み）、退屈極まる日課の散歩に必死になって執着し、それによって退屈極まる人倫的死の安定の虚妄の自我に必死になって執着し、この無味乾燥な執着の充足により、脅かされた「所有のたかみ」の迷妄の回復を、人倫的死の安定の回復を、出口無き悪しき循環を意味するだけの人倫的死の安定の回復を計っているのです。そうなると、彼らの散歩は、無自覚ながら、あの水鏡の死顔からの空しい遁走の試みとしてのプルーフロック的方向無き流浪にそのままなっているわけです。先に、

「汝の弟の血の声地より我に叫べり。されば汝は詛れて此地を離るべし。此地その口を啓きて汝の弟の血を汝の手より受けたればなり。」

とありましたが、原罪を負うたアダムとイヴが流離の身となったように、また、長子のカインが弟殺しの大罪ゆえに「地に吟行ふ流離子となるべし」と運命づけられたように、「私は殺す（カイン・ジーキル）」として立つアタスンもエンフィールドもまた「精神の虚しさのみ深まりゆきて考えるべきことのなき恐怖」――アベル・ハイドの死顔の恐怖に駆り立てられて、明でもなければ暗でもない「受動的虚無（ニヒリズム）」の薄明のなか、出口無き「円形の砂漠」（T・S・エリオット）を「吟行ふ流離子」となっているのです。たとえ暗号的であれ、自分が直面せしめられた水鏡に映る自分の死顔への恐怖に駆り立てられての、脅かされた日常性への執着の強化は、ややっこしい所有的執着を抜きにしているだけに、かえって執着というものの本質を直截に語っており、また、流離の本質を端的に語っていると言えます。尤も、それは終始暗号的流離にとどまる可能性のつよい、極めて受動的な、衰弱した人間的弱さとしての執着であり、「菩提の体」となりうる、いわば、強さの弱さとしての積極的煩悩と対照をなすものと言わなければなりません。

さて、こうなると、「慎重居士（ブルーフロック）」にして謹厳居士のアタスン氏の強靱なる自制心も再考の余地があるようです。つまり、彼の模範的禁欲の習慣も、いまやまさしく習慣なのであって、禁欲それ自体が、欲望の充足を求めるよりも、欲望によって人倫的死の安定を攪乱されることを好まない彼の性分からきたものであり、しかも禁欲が習慣化して禁欲の持続そのものが彼において人倫的死の安定を維持しているのではないかとかんぐりたくなるのです。そのようにみるならば、他人の不行跡への「定評ある寛大さ」も、自分は人倫的死の安定を攪乱される恐れなく、他人において不行跡を楽しむという魂胆かも知れず、他人の不行跡に「時に羨望に近い念をもってその盛な血気ぶりに驚嘆し、どんな極悪非道の犯罪の場合でも、犯人を非難するよりはむしろ助けてやりたい気になる」アタスン弁護士の心情もそういう意地の悪い見方からしてうなづけるのです。

ところで、右のアタスン氏の自制とも関聯することですが、いまひとつの「吟行ふ流離子」があります。無関心はそれ自体無関心的執着ということですが、いわゆる所有欲の生起は、無関心的から関心的への執着の強化を意味しています。所有欲は対象的に見るものへの本格的執着ですが、この対象的に見るものは、そこにそれとして暗号的に表れている虚妄の自我であるゆえに、対象への本格的執着は虚妄の自我への本格的執着ということです。ここで注目されるべきは、無関心的執着から関心的執着（所有欲）への必然的移行は無関心的執着、つまり、人倫的死の安定に対する自己不満が自我の自己矛盾性として虚妄の自我の中にあるという事実です。先に私は、私が客体的世界を対象的、自己満足的にながめるとき、私はそこにそれとして表れている虚妄の自我自身である「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る虚妄の私自身の死顔をそれと知らずしてながめていること、つまり、この水鏡の死顔は、ひとつには、それと知らずして「私は殺す（ジーキル）」なる私（殺人者ハイド）として立ち、かく立つことに

おいて私が殺した者に呪い殺され知らずして人倫的死として立っている私の、水鏡に映る死顔であること、また、その私の死顔が隠れたる死の顔、つまり、復讐の死神ハイドの顔であって、この死神ハイドが、私が水鏡に映る私の死顔に気付くというかたちで人倫的死なる私の隠れたる実体（ハイド）を思い知らせ、それを通して殺人者ハイド、つまり、「私は殺す（ジーキル）」という私の知らない私の隠れた実体（ハイド）の覚知を迫っていること、を申しました。別に言えば、復讐の死神ハイドは、本来、私の「所有のたかみ」の迷妄そのものが「受動的虚無」の深淵における私の溺死状態に他ならぬことを覚知せしめ、その溺死の現実の覚知というかたちで、「所有のたかみ」の迷妄を空無化し、その覚知（生命の水）の中に溺死せしめる「能動的虚無」の深淵の主（ぬし）なのですが、所有欲においては、虚妄の私自身である「受動的虚無」の深淵に真実の復讐の死神ハイドはさらにより深く姿を隠した姿で表れます。つまり、「受動的虚無」の深淵の主である虚妄の私の自己破壊性としてその暗号的影を落しています。「受動的虚無」の深淵の主とは、人倫的死の「所有のたかみ」の迷妄にある私（隠れたる「私は殺す（ジーキル）」としての、殺人者ハイドとしての私）が「受動的虚無」の深淵に知らずして映し出している私（ジーキル）自身の隠れた死の素顔（ハイドとしての私）のことです。本来ならば、私（「私は殺す（ジーキル）」としての私）はかかる自分の素性に気付かず、従って、「受動的虚無」の水鏡に映る自分の死顔に気付くこともなく、「所有のたかみ」の迷妄に耽ることによって、自分自身である「受動的虚無」の深淵における溺死状態をいつまでも続けるところなのですが、復讐の死神ハイドが隠れたる「私は殺す（ジーキル）」としての、殺人者ハイドとしての私の正体の具現たる水鏡の死顔（ハイド）を通して隠れたる姿で私に働きかけるお蔭で、私は人倫的死としてありながら人倫的死としての私に隠れたるかたちで気付くことになるのです。つまり、深淵の死顔（ハイド）は単に水鏡に映る実体（ジーキル）の映像というだけではなくなり、それ自体がひとつの実体を有する死の顔、深淵の主の死の顔（ハイド）と

なってそれを覗く者（ジーキル）を脅かすことになります。

ところで、無関心的執着（人倫的死の安定）から関心的執着（いわゆる所有欲）へと必然的に移行するということは、人倫的死としてありながら、かかる自己に気付かず自己満足している私が、この私の人倫的死の事実に必然的に気付くことを意味しますが、かく自己の人倫的死の素顔に必然的に気付くということは、私の中にこの人倫的死（「私は殺す（ジーキル）」としての私）に不満な隠れた私（ハイド）があるということを意味します。私は、一方では、私の人倫的死の素性に気付かず、かかる私をもって善しとして自己満足する私として立ちながら、他方では、私の人倫的死の素性に気付いてそれに対する不満として立ち、自己満足している私を脅かすという、自己分裂的、自己矛盾的自我として成り立っているわけです。別に言えば、「受動的虚無」の深淵の水鏡の死顔は、そこにそれとして映っている偽善的死の安定の私（隠れたる「私は殺す（ジーキル）」としての私）の隠れたる死の素顔（ハイド、隠れたる殺人者ハイドとしての私）でありながら、自己満足的「所有のたかみ」の迷妄にある私（ジーキル）は水鏡に映る自分の死の素顔（ハイド）を見ていながら見ていない、気付いていない、つまり、水鏡の死の素顔が私（ジーキル）から隠れている（ハイド）のですが、ところが、水鏡の死の素顔（ハイド）は、気付かずにそれを見ている死の素顔の持主（ジーキル）を見ている、しかも不満顔で見ているのです。私が、無自覚ながら、私の人倫的死の事実に必然的に気付くとは、ひとつには、先ずハイドとして気付くことです。水鏡の死顔はそこに映る偽善的死の安定の私（ジーキル）の隠れた死の素顔でありながら、同時にまた、偽善的死の安定の私（ジーキル）に不満な私（ハイド）の死顔になっているのです。この自己不満の死顔（ハイド）は偽善的自己満足的死の安定にある（隠れたる（私は殺す（ジーキル）」としての）私の隠れたる素顔として同じく偽善の死顔でありながら、偽善的死の安定の私に不満をいだく脅威的死顔なのです。ところで、この死顔ハイドは「私は殺す（ジーキル）」としての私の水

鏡に映る死の素顔であるゆえに、実は、ハイドはジーキルの人倫的死の姿であり、（殺人者ハイドは「私は殺す」としての私ジーキルである）かく、ハイドはジーキルの（ハイド自身の眼に）隠れたる素性であるゆえに、ハイドは（ハイド自身の眼に）隠れたるジーキルです。他方、「私は殺す」としての私は水鏡に映る死の素顔ハイドの（ジーキル自身の眼に）隠れたる持主であるゆえに、ジーキルは（ジーキル自身の眼に）隠れたるハイドです。かように、ジーキルは隠れたるハイドであり、ハイドは隠れたるジーキルであるゆえに、お互いの眼に相手の実体が、従って、おのれの実体が隠れているから、互いに対立していますが、実は、相互還元されうるジーキルとハイドなのであって、その対立は自己同一性に基いた対立、自己同一的自己矛盾であるということになります。従って、このハイドは先ほどの真実の復讐の死神ハイドではなくて、それのパロディであり、似而非ハイドですが、右の「隠れたる」「隠れている」というところに、実は復讐の死神ハイドがまさしく隠れているのであり、また、隠れたる姿でジーキル・ハイドとしての虚妄の自我に働きかけているのです。

実際、「受動的虚無」の深淵の死顔の似而非ハイドが、彼自身の中に隠れて働きかける復讐の死神ハイドのお蔭で、単に「私は殺す」としての私の、水鏡に映る人倫的死の映像であるにとどまらず、それ自体ひとつの実体を帯びて、「受動的虚無」の深淵に溺死しているおのれの姿に気付いたとき、似而非ハイドはジーキルの「所有のたかみ」そのものが、実は、ジーキルを主とする「受動的虚無」の深淵であること、そして自分はそのなかに捉えられて溺死した身であることに気付いたわけです。本来ならば、このとき、ハイド（人倫的死としての私）は、いま自分が見ているジーキルがハイド自身であること、おのれ（人倫的死としての私）が（おのれの眼に）隠れたるジーキル（「私は殺す」としての私）であったことを覚知すべきだったのです。そうすれば、隠れたるジーキル（「私は殺す」としての私）がその覚知というかたちで顕在化し、つまり、ハイドが顕在化せるジーキルとし

て立ち、同時にそれとしてハイド自身が顕在化し（人倫的死としての私ハイドが「私は殺す」としての私であること、或は「私は殺す」としての私が人倫的死としての私ハイドであることを覚知し）、その意味においてハイドとジーキルは自己同一化（隠れたる「私は殺す」としての私、隠れたる殺人者ハイドとしての私の、その隠れたる素性の覚知における自己同一化）したことでありましょうし、また、そこに復讐の死神ハイドの隠れたる働きかけの真意があったのです。しかしながら、ハイドは眼の前に見るジーキルが実はハイド自身であり、ハイド（人倫的死としての私）が隠れたるジーキル（「私は殺す」としての私）であるということを知らず、ジーキルを対象的に捉え、つまり、私ハイドを「私は殺し」人倫的死たらしめている「私は殺す」なる私ジーキルとして捉えるのです。そこでハイド（人倫的死としての私）はこの溺死状態から脱すべく、おのれを溺死せしめている「受動的虚無」の深淵の主であるジーキル（「私は殺す」としての私）に復讐心をいだき、このジーキルの支配を、つまり、「受動的虚無」の深淵を正体とする「所有のたかみ」の迷妄を覆そうとします。他方、これまで「所有のたかみ」の迷妄に耽っていたために、おのれ自身である「受動的虚無」の深淵の水鏡の死顔（隠れたるハイド）を見ながら見ていなかったジーキル（隠れたる「私は殺す」としての私）は、その自己満足の「所有のたかみ」の迷妄をハイドによって脅かされて、それの実体である「受動的虚無」の深淵がジーキルの眼前に露わになり、その深淵の死の顔の脅威の眼差しに気付いて恐れ戦くのですが（見る眼を見る眼を見る眼）、しかし、ジーキルはそれがそこに映るおのれの（これまで隠れていた）死の素顔であることに気付かず、（その意味で、その深淵の主はジーキルの眼に隠れており、）逆に、ジーキルは深淵の死顔を自分の素顔の映像としてではなくて、自分に対して立つひとつの実体として、つまり、おのれの「所有のたかみ」を強請る殺人者ハイドの死の顔として捉え、（ジーキルの眼には）明らかに「受動的虚無の深淵」の主であるハイドを抑えつけて、脅かされた

自己満足の「所有のたかみ」（実は、人倫的死の安定）を回復しようとするのです。ところで、「所有のたかみ」のジーキルが深淵の死の顔の脅威的眼差しを見たとき、（私が無自覚ながら私の人倫的死の事実に気付くとは、いまひとつには、かくジーキルとして気付くことです、）本来ならばジーキルは、いま自分が眼前に見ている死の顔ハイドがジーキル自身であること、おのれが（おのれの眼に）隠れたるハイド（人倫的死）であったこと、つまり、その自己満足の「所有のたかみ」が実は迷妄であり、人倫的生どころか「受動的虚無」の人倫的死であることを覚知すべきだったのです（隠れたる「私は殺す」としての私、隠れたる殺人者ハイドとしての私の、その隠れたる素性の覚知における自己同一化）。ところで、ジーキルが、おのれが人倫的死（ハイド）であることを覚知するということは、その人倫的死（ハイド）が、すでに述べたように、裏を返せば、おのれが知らずして殺した客体世界・本来的自己をも含意するのであるゆえに、同時に、客体世界・本来的自己を殺した自分自身を覚知したこと、つまり、ジーキルが「私は殺す」としての私という、これまで隠れていたおのれの真実の素性（ハイド）を覚知したこと（その覚知というかたちでのジーキルとハイドの自己同一化の成就）を物語るものであり、またハイドを通じてジーキルに暗に働きかけている復讐の死神ハイドの真意もそこにあったのです。復讐の死神ハイドの働きかけのお蔭で、似而非ハイドが人倫的死の「受動的虚無」の深淵に溺死している自分に気付いたとき、もしもハイドが「所有のたかみ」の主、実は「受動的虚無」の深淵の主であるジーキルを対象的に捉えて、自分をかかる溺死状態に置いているジーキルへの不満から、これを覆すことによっておのれの溺死状態から脱け出そうとするのではなくて、逆に、ハイド自身が隠れたるジーキルであったこと、ハイド自身が「受動的虚無」の深淵の（彼の眼に）隠れたる主ジーキルであって、自分が自分を溺死せしめていたのだということ、を覚知して、この、おのれを主とする「受動的虚無」の深淵におけるおのれ自身の溺死という現実の覚知の深まり

というかたちで「受動的虚無」の深淵なるおのれの現実に深く身を委ねていったならば、つまり、その覚知の深まりというかたちであらためて溺死へ、おのれの空無化へ身を委ねていったならば、人倫的死の「受動的虚無」の深淵は、その深淵の覚知において、その深淵の覚知というかたちで、計らずもそのまま生命の水の「能動的虚無」の深淵と化し、その覚知的溺死は生命の水への溺死となり、かくして溺死の身のままにはじめからすでに救われてあるわが身を覚知することとなったでありましょう。また、もしも「所有のたかみ」のジーキルがハイドを「受動的虚無」の深淵の主の死の顔として対象的に捉えて、自分を脅かすハイドへの不満からこれを抑制しようとするのではなくて、逆に、ジーキル自身が（彼の眼に）隠れたるハイドであったこと、彼の「所有のたかみ」そのものが実は「受動的虚無」の深淵であるゆえに、ジーキル自身が「受動的虚無」の深淵の（彼の眼に）隠れたる主ハイドであって、ジーキルの「所有のたかみ」の自己満足そのものが、実は、おのれを主とする「受動的虚無」の深淵におけるおのれ自身の溺死状態に他ならないこと、を覚知し、その現実の覚知の深まりというかたちで「受動的虚無」の深淵なるおのれの現実に深く深く身を委ねていったならば、つまり、その覚知の深まりというかたちであらためて溺死へ、おのれの「所有のたかみ」の迷妄の空無化へ身を委ねていったならば、人倫的死の「受動的虚無」の深淵は、その深淵の覚知において、その深淵の覚知というかたちで、計らずもそのまま生命の水の「能動的虚無」の深淵と化し、その覚知的溺死は生命の水への溺死となり、かくして溺死の身のままにはじめからすでに救われてあるわが身を覚知することとなったでありましょう。このジーキルの覚知的溺死とハイドの覚知的溺死はジーキル・ハイドとしての虚妄の自我自身の虚妄性の覚知であり、その覚知というかたちでの空無化であって、それこそ復讐の死神ハイドの、似而非ハイドへの隠れたる働きかけの隠れたる真意だったのです。その意味で、この人倫的死への意志（人倫的死への意志ではない）こそ人倫的生への意志に他なりません

が、そこにおいてジーキル・ハイドを空無化する「能動的虚無」の深淵の主はあの隠れたる復讐の死神エリニュス・ハイド（殺された客体世界・殺された本来的自己）であって、ジーキル・ハイドが覚知的空無化に身を委ねてゆく過程は復讐の死神エリニュス・ハイドが隠れたる姿のままに、その空無化の進行というかたちで、次第に姿を顕わにしてゆく過程であり、復讐の成就において、つまり、生命の水の「能動的虚無」の深淵へのジーキル・ハイドの覚知的溺死の成就において、覚知的溺死の成就としてその隠れたる姿を完全に顕現することになります。かくして、復讐の成就はまさしく大慈悲の成就に他ならず、復讐の死神エリニュス・ハイドは実は大悲の死神エウメニデスなのです。

しかしながら、私の現実はこれとは逆の方向に展開してゆきます。「受動的虚無」の深淵の死の顔ハイドは自分が隠れたるジーキルであったことを自覚せず、ジーキルをば「所有のたかみ」の迷妄なる「受動的虚無」の深淵の中にハイドを溺死せしめている元凶として対象的に捉え、このジーキルに対する不満からハイドは欲望（本格的所有欲）と化し、欲望の充足によってジーキルの「所有のたかみ」の迷妄「受動的虚無」の深淵を克服し、おのれの溺死状態から脱け出そうとし、他方、ジーキルはジーキルで、これまでおのれの「受動的虚無」の深淵をもって自己満足的無知ゆえに「所有のたかみ」としていたために、その水鏡に映る自分の死の素顔（ハイド）を見ながら見ていない、気付いていなかったジーキルが、いまや自分を脅かす死の眼差し（ハイド）に気付いても、それが水鏡に映るおのれの死の素顔（ハイド）であることに気付かず、それをおのれの外なる「受動的虚」の深淵の主ハイドの死の素顔として対象的に捉えて恐れ戦くのです。かくしてジーキルとハイドとの関係は支配被支配、征服被征服の問題となり、脅かされた「所有のたかみ」の私ジーキルは欲望のハイドの私を抑制しにかかり、それの成功によっておのれの安定（実は、人倫的死の安定）を回復し、曝露されかけた「受動的虚

無」の深淵の現実は再び自己満足的忘却の「所有のたかみ」の迷妄に戻ります。かくして「受動的虚無」の深淵の主なるハイドの死の顔は再び隠れてしまい、隠れた姿でまた新たな機会をうかがうことになりますが、このハイドの死の顔はジーキル自身の水鏡に映る死の素顔であるゆえに、ハイドの死の顔が再び隠れることによって、実は、ジーキル自身の死の顔がジーキルの眼から隠れてしまうのであり、また、ジーキルの人倫的死の素顔は、裏を返せば、ジーキルが知らずして殺した客体世界・本来的自己の死の顔であるゆえに、それが再び隠れてしまうということは、その殺害の事実の発見の可能性が再び隠れてしまうこと、ジーキルが「私は殺す（ジーキル）」としてのジーキルなるおのれの隠れた素性の発見をなす可能性が再び隠れてしまうことを意味します。これがいわゆる自制の究極的に含意するところであり、自制心に富むアタスン氏の内的状況でもあります。尤も、欲望ハイドにしたところで、なるほどそれは人倫的死の安定にあるジーキルへの不満の表れであるゆえに、一種の人倫的生への意志ですが、しかし、ハイドはおのれが実は（ハイド自身の眼に）隠れたるジーキルであることを覚知せず、（覚知しないから隠れたるジーキルである、）このおのれの素性を棚上げしてジーキルを自分の外なるものとして対象的に捉えてこれを征服しようとするのですから、人倫的生への意志としてのハイドは、実は、自己隠蔽、自己忘却を求める結果となるような似而非人倫的生への意志としてのハイドです。ジーキルとしての私の自己満足的「所有のたかみ」が実はハイドを溺死状態に閉じ込めている人倫的死の「受動的虚無」の深淵であることを知って、ハイドとしての私はこの人倫的死の「所有のたかみ」の迷妄＝「受動的虚無」の深淵を欲望充足によって克服し、人倫的生のたかみを形成しようとするのですが、ジーキルの抑制を破ってその人倫的生のたかみを成就したところで、それは欲望、つまり、所有欲の充足による「所有のたかみ」に他ならず、自分では充足感に酔い痴れていい気になっていますが、実は自己隠蔽、自己忘却の成就にすぎません。実際、その充足感がやがて消え去

ると、ハイドが成就した「所有のたかみ」が人倫的生のたかみどころか、自分が征服したはずのあのジーキルの人倫的死の安定なる「所有のたかみ」――人倫的死の「受動的虚無」の深淵であることが判明するのであり、自己隠蔽・自己忘却されたものが再び露わにされるのみであり、成功がとりもなおさず失敗なのです。その意味では、欲望ハイドは（ハイド自身の眼に）隠れたる人倫的死への意志であると言わなければなりません。人倫的死への意志とは「受動的虚無」の深淵におけるおのれの溺死の現実の忘却への意志、人倫的溺死の状態をもって人倫的生として疑わぬ自己満足的無知の安定（その自己満足的無知こそ人倫的溺死の状態に他ならぬゆえに、自己満足的死の安定）への意志です。欲望ハイドは人倫的死の「受動的虚無」の深淵に溺死している自分に気付き、その溺死状態から遁れようともがいているのですが、欲望はまさしく「われとわが身を焼く煩悩の火」であり、欲望の充足を求めることは、それによってこの「われとわが身を焼く煩悩の火」を鎮め、かくして溺死の自覚たる欲望自身の苦悩を鎮め、欲望としてのおのが生涯に終止符を打ち、再び人倫的死の安定（つまり、自己満足的無知の安定）に帰ることを暗号的に求めていることです。しかしいずれにしても、それは溺死なる自己の現実を自覚しながら、自己忘却というかたちでそれから脱しようという空しい試みにすぎず、この似而非ハイドの欲望は溺死なる自己の現実の自覚への恐怖、あのおおいなる復讐の死神ハイドとその「能動的虚無」の深淵への恐怖であり、この死神ハイドからの空しい遁走の意志なのです。

他方、「私は殺す（ジー・キル）」としての私は、欲望ハイドを抑制することに失敗してその支配関係が逆転したとき、実は、欲望ハイドを被支配というかたちで支配することになるのです。それはハイドにとってだけではなく、ジーキルにとっても全く思いもかけぬ結果なのです。というのは、欲望ハイドは隠れたる人倫的死への意志としてハイドの眼にもジーキルの眼にも隠れたるジーキルの自己回復と自己強化の試み（ジーキルの自己満足的人倫的死の安

定の回復と強化の試み）であり、また、ジーキルはジーキルの眼にもハイドの眼にも隠れたる欲望ハイドであるから、ジーキルは（ハイドの眼にもジーキルの眼にも）隠れたる人倫的死への意志として欲望ハイド自身に取り憑き、欲望ハイドの自己充足が、ハイドにとってもジーキルにとっても思いもかけず、そのまま人倫的死への意志の成就となり、かく両者にとって思いもかけずハイドの人倫的死が実現することになり、ジーキルはおのれの（人倫的死の）安定を回復することになるわけです。実際、ハイドは「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る「私は殺す」としての私の（ハイドの眼に）隠れたる死の素顔であり、従って、ジーキルは（ハイドの眼に）隠れたるハイドであり、或は、ハイドは（ハイドの眼に）隠れたるジーキルであるゆえに、その意味でもジーキルは（ハイドの眼に）隠れたる人倫的死への意志として（ハイドの眼に）隠れたるハイドなのです。しかしそのことなら、「私は殺す」としての私は、自分では気付きませんが、人倫的死の「受動的虚無」の深淵の水鏡におのれの隠れたる実体である人倫的死のハイドを必然的に映し出しているのであるゆえに、ハイドは（ジーキルの眼に）隠れたるジーキルであり、或は、ジーキルは（ジーキルの眼に）隠れたるハイドであり、その意味でもハイドは（ジーキルの眼に）隠れたる人倫的死への意志として（ジーキルの眼に）隠れたるジーキルなのです。事実、ジーキルとハイドは虚妄の自我の自己矛盾的自己同一性に他ならず、ジーキルの素性が、自分では無知ながら、「私は殺す」、つまり、自己中心的他者否定的虚妄の自我であるとすれば、ハイドは欲望ハイドであるゆえにこの自己中心的他者否定的虚妄の自我の強化、つまり、欲望ハイドは強化された「私は殺す」以外の何ものでもないわけです。この虚妄の自我の自己強化は、自我自身の自己破壊性として定着しているあの隠れたる復讐の死神ハイドによって「私は殺す」としてのおのれの素性を、暗号的ながら、曝露されかけたジーキルが自己補強（欲望ハイドの充足）によってこの素性の自己隠蔽、自己忘却を計ることであり、従って、それの成功は、一見、隠れたる

復讐の死神ハイドを征服することに成功したことを意味するかのようですが、それはあくまでおのれの素性の自己隠蔽、自己忘却の成功にすぎないゆえに、実は、隠れたる復讐の死神ハイドからの遁走の成功にすぎないわけです。それゆえ、先にも申したように、欲望ハイドは隠れたる復讐の死神ハイドからの遁走への意志、つまり、隠れたる「私は殺す（ジーキル）」としての私（欲望ハイド）の、このおのれの素性の覚知からの遁走への意志なのです。しかしながら遁走の成功はとりもなおさず失敗であり、自分が逃げおおせたはずの復讐の死神ハイドに思いがけなくも直面して、再び欲望充足によって征服、つまり、遁走を計るという出口無き悪循環をくり返すわけです。

まことに、虚妄の自我はかく「私は殺す（ジーキル）」なるジーキル或はカインとして永劫に「吟行ふ」定めにあるのですが、「吟行ふ流離子」なるアタスン、エンフィールドが今散歩する欲望の街並みもまた「吟行ふ流離子」です。「だれもかれももっと収入をよくしようと競い合い」とはだれもかれももっと収入をよくしようと競い合わずにはおられない、競い合わずにはワレを失うみたいで、だれもかれもが「受動的虚無」の深淵の水鏡に映る隠れた自分の死顔（復讐の死神ハイド）に暗号的に気付き、ジーキル・ハイドとして恐怖に駆り立てられて所有欲の充足を通してこの虚無の深淵の現実を「所有のたかみ」の幻想に贋り変え、自己隠蔽、自己忘却の試みを空しくくり返す永劫に「吟行ふ流離子」なのです。「客の眼を惹こうと収益の余りを店頭の飾り立てに注ぎ込み、……その通りは薄汚い近隣と対照をなして、まるで森林の中の火事のように光彩を放つのであった」という外的風景は、そのまま、「収入をよくしようと競い合う」商店主たちの内的風景になっている、いや、内的風景の具現になっているわけで、「森林の中の火事のように」という比喩は比喩ではなくて内的現実なのです。この森はどうやらW・ブレイクの謂う「大脳の森」であり、しかも、自己破壊的にも、恐しい人喰い虎の隠れ棲む「大脳の森」です。

虎よ、夜の森に
燃え輝く虎よ、
いかなる不死の手、眼が
そなたの恐しい均斉を作りえたのか。

「受動的虚無」の深淵は、イメージを変えるなら、同じく、殺された客体世界—殺された本来的自己—人倫的死としての虚妄の自我を意味する「大脳の森」'Human Abstract'です。この「大脳の森」（ジーキル）は光と生命の文明の都を気取りながら、実は、隠れたる暗き無知の死の森（ハイド）なる偽善の都府（「私は殺す」）ですが、この「大脳の森」の「闇の奥」、「闇の心臓」'Heart of Darkness'（J・コンラッド）には恐しい人喰い虎（復讐の死神ハイド）が隠れ棲んでいて、その「燃え輝く」脅威の眼光で偽善の都府、つまり、暗き無知の死の森を焼き尽そうとするのです。尤も、偽善的死と闇が生命と光明を気取るがゆえに、本来的光と生命は逆に能動的闇として表れざるをえず、その「闇の中核」が燃え輝く闇の光と闇の生命の火の虎なのです。しかしながら、無知の死の森（ハイド）なる偽善の都府（「私は殺す」）は無知なるゆえに、この浄火が無知の死の森（ハイド）なるおのれの実体を告知するものであることを知らず、従って、偽善の都府（ジーキル）は無知の死の森（ハイド）なるおのれの実体、つまり、偽善の都府（「私は殺す」）なるおのれの実体の覚知の無底の深化というかたちで、この浄火に焼き尽され、つまり、喰い殺され、空無化されることなく、「燃え輝く虎」（復讐の死神ハイド）が、この無知の死の森（ハイド）の覚知、覚知された無知の死の森、というかたちで本来的生命と光の文明の都として顕現することがなく、逆に虚妄の自我はその浄めの火を脅威としてそれに背を向けるがゆえに、それは本質変化して遁走の欲望の火（欲望ハイド）と化し、浄めの火（復讐の死神ハイド）の働きかけをそのなかに隠れ

たかたちで体現するにとどまるのです。尤も、偽善の都府（ジーキル）は自然発火して欲望の森火事（欲望ハイド）を起し、かくして無知の死の森（ハイド）なるその隠れたる実体をみずから露呈するのです。尤も、かくみずからを露呈しながら、無知なるゆえに、偽善の都府（ジーキル）は単に欲望（ハイド）の充足によってかかる自己の一層の強化を計るのみです。

こうなると、「森林の中の火事のように光彩を放つ」欲望の街並みは、それを眺めながら散歩するアタスン、エンフィールド自身の姿にそのままなっているわけです。尤も、この欲望は妄執にまでたかまらず、従って「大脳の森」全体が欲望の火の森と化すことなく、欲望の森火事は「森林の中の火事」にとどまるのが常です。

（つづく）